

第20回 日本認知症グループホーム大会

「おまかせください！」

認知症グループホームに!!

～地域包括ケアシステムで求められる認知症グループホームの役割～

期日：平成30年9月7日（金）・8日（土）

会場：栃木県総合文化センター

主催：公益社団法人 日本認知症グループホーム協会

参加氏名：河野光男

今回の日本認知症グループホーム大会栃木大会は、第20回の記念大会として開催されました。大会の開催直前には関西地方の豪雨災害や北海道地震の被害など、開催に際し心配な事象もありましたが、昨年と同じく全国から発表者を含め約1000名の方が参加されました。

先ず一日目には、厚生労働省老健局長の大島一博氏より「介護をめぐる課題と展望」と題し、介護保険制度が導入された西暦2000年当時の大目標「①介護サービスの市場を作る。②介護を社会化する。」を振り返りながら、現在までの「進む高齢化と人口減少」「“若返る”高齢者」「高齢者の身体機能の変化」「GDPの推移」、また今後の「社会保障給付費の見通し」「医療福祉分野における就業者の見通し」など数値化したデータをもとに話をされました。そこから見えてくる課題として、少子化の克服するために子育て環境を整備することや「予防・健康づくり」として中高年のメタボ対策や高齢者のフレイル対策を図ること、財政面や人材面の安定化のための対策について説明されました。また地域包括ケアについても話をされ、認知症になっても大丈夫な社会は、「地域づくりをはじめとする様々な取り組み」や「住民・ボランティア、自治体、介護・福祉関係者、教育関係者、各種経済活動団体など、多くの関係者の総力」によって実現できるなど、地域づくり（地域共生社会）の重要性を説明されました。

特別講演では、元NHKアナウンサーで作家の下重暁子氏が「極上の時間の過ごし方」と題し、ご自身のアナウンサー時代や生い立ちなどの経験をもとに生と死について、特に死を迎える前の時間をどう過ごすか、どう楽しんで過ごしてもらうかを意識しながら接すること、そして高齢者と「人間と人間」としての付き合い方、相手の話を最後まで聞く、寄り添うことが大事であると話をされ、また介護で働く方々はまずは自分自身を知っていただき、自分自身を大事にして介護者として頑張ってもらいたいとも話されていました。

教育講演では、香川大学の中村祐教授が「グループホームで見られるBPSDとその対応」と題し、認知症の大部分を占めるアルツハイマー型認知症における様々な中核症状から現れるBPSDで「興奮」や「攻撃性」「易怒性」「取り繕い」「妄想」などについて動画を交えながら解説されました。中村教授は実際の現場においては、中核症状の理解とBPSDの診断と対応に苦慮することが多いのではないかと、現場の大変さを理解されており、一義的に抗精神病薬を用いるのではなく、適切な対応や適切な抗認知症薬の使用（種類、組み合わせを含めて、変更も考慮）が、先ずとるべき対応であると解説されました。

二日目は分科会が8会場、ポスターセッションが2会場で開かれ、全国から参加した107の事業所が事例発表をしました。また、「ワールドカフェ風情報交換会」「GH経営を大いに語る場」もそれぞれの会場で同時に開催されました。

午後からのシンポジウムでは、認知症介護研究・東京センター長の山口晴保氏が「認知症GH

ケアの素晴らしさ！地域における認知症ケアの拠点としての期待」～認知症 GH における、GH ケアの効果・評価に関する調査～というテーマでコーディネーターとして報告され、他 3 名のシンポジストと討論されました。

H30 年は、医療・介護・障害福祉の 3 報酬の同時改定に加えて、医療計画・介護保険事業計画・障害福祉計画の 3 計画の見直しの全てが重なる、国にとっても非常に大きな節目の年であり、2025 年の「完成」を目指している「地域包括ケアシステムの構築」への取り組みが本格化する年でもあります。今回の大会に参加して、その「地域包括ケアシステムの構築」に向け、「認知症の人の生活の全てに寄り添い」「認知症の進行を遅らせ」「認知症の人の BPSD の改善につなげ」「認知症の人の QOL の維持・向上につなげる」ことが、認知症 GH ケアの素晴らしさであり、その認知症ケアを地域に向かって発信し、より地域の方々に知ってもらいたいと感じました。

